

品田誠平先生記念号によせて

品田誠平先生は、昭和九年三月立教大学商学部を卒業後、満洲中央銀行に奉職され、敗戦とともに引揚帰国してからは、昭和二十五年四月立教大学経済学部講師、同二十八年四月教授として二十七年間勤務されて、昭和五十二年三月定年退職されました。

その間、先生は昭和三十五年五月から三十八年三月まで経営学科長として経営学科の充実に尽力され、学部では会計学原論、原価計算論、大学院修士・博士課程では管理会計特殊研究を担当、講義をおこなって、経済学部の発展のため、また後進の育成に努力され、内外ともに多難な時代にあつて、よくその重責を果たされたのでした。また、先生はその御専門の学殖の故に、社会学部観光学科においてホテル会計の科目も兼任されて、その発展に協力されました。

品田先生の御専攻の分野は、著作目録からも明らかなように会計学であり、本邦会計学界においては、先生はあくまでも実務に密着しつつ会計的諸概念と会計システムの理論を徹底的に究明された点で、まさに開拓者としての位置を占めておられます。会計は本来経済的事実の記録、計算、分類、伝達という実務をおこなうものであり、こうした実務のなかで自ずから慣習として処理、報告の形式が定まり、その手続きの合理化、すなわち、記帳労働を節約し、計算を正確におこない、業績評価にも役立つように勘定構造や帳簿組織がシステム化されたものであります。すでにマックス・ヴェーバーが明確に定式化したところの、あの近代資本主義の合理性を特徴づけている資本計算の形式的合理性が示されている複式簿記のメカニズム、それを近代的経営管理の構造論理に即して再検討していこうと努め

られたのが品田先生の立場であり、その学問的性格は「能率式伝票会計」、「割賦販売会計」を経て、主著「会計学」、「原価会計」の裡（うち）に体系化されていると言つてよいでしょう。こうした学問上の業績によつて、先生は昭和三十年三月、商学博士の学位を受けられました。

品田先生の学風にみられる、あくまでも実務に密着していこうとする側面は、わが国会計学界の権威者をもつて構成される公認会計士審査会の試験委員に四期にわたつて選ばれたことの裡にもあらわれ、また日本会計研究学会理事、中小企業振興審議会専門委員、中小企業近代化審議会専門委員をされたことなどにも示されており、先生の学的営為が広く学界、実社会に寄与するところ大であつたことがわかります。

もとよりこの間をつうじて、本学の研究と教育の充実、発展にあつてこられたことは、その門下で育つた数多くの大学教員および研究者・職業会計人の養成をみてもわかるところでありますし、また文献・資料の収集・整備に努められた事実からも十分に理解できると思ひます。かくて立教大学は、先生が経済学部教授会のメンバーとして、さらに立教大学の会计学主任教授として、その学識と経験を生かすつづつ本学の発展のために尽力してこられたことを深く感謝して、昭和五十二年七月、先生に名誉教授の学位を贈りました。

私たちは、先生の温厚篤実な性格ならびに学風を偲び、その定年退職の秋にあたり、先生の本学、とくに経済学部への貢献と御指導に対する感謝の気持ちをあらわすべく、本号をもつて先生の業績を記念する特集にあてることにしました。

品田先生は自らの人生の四半世紀以上の歳月を過ごされた立教大学を本年三月に去られることになりましたが、経済学部とともに学部の充実、発展のために尽された事實は、消し難く本学の歴史に刻みこまれることでしょう。これ

からも先生がますます御元気で学界、実社会において活躍され、私たちのために御指導下さいますようお願い申し上げます。

昭和五十二年十月

経済学部長 住 谷 一 彦